



RSウイルス母子免疫ワクチン(アブリスボ®)に関して

RSウイルス感染症とは、発熱や咳などの症状が出る病気で、生後1歳までに50%、2歳までにほぼ100%が感染する一種の風邪です。

この感染症に対して、2026年4月より新生児や乳児の感染、重症化を防ぐという目的で、妊婦を対象(24～36週)として組み換えRSウイルス母子免疫ワクチン(アブリスボ®)が定期接種化されることになりました。

この聞き慣れない『母子免疫ワクチン』とは、「接種した妊婦の体内で作られたRSウイルスに対する抗体を、胎盤を通じて胎児へ届け、乳児のRSウイルス感染症を予防する」ものとなっています。

しかしこのワクチンに対しては以下の重大な懸念点があります。

- ・下気道感染症中のRSウイルスワクチン接種群の有意な抑制効果は認められない
- ・RSウイルス感染症自体は減っていても他の感染症は減っておらず、またRSウイルスワクチンを接種した方が生後6ヶ月以降に重症化する傾向がある(抗体依存性免疫増強の可能性あり)
- ・非接種妊婦より接種した妊婦の方に重度～致命的有害な事象が発現している
- ・非接種妊婦より接種した妊婦の方が早産のリスクが高い
- ・厚労省への接種後の副反応報告例—胎児死亡、子宮出血、呼吸困難、癒着胎盤、胎盤早期剥離、前期破水、切迫早産、胎児発育不全、低出生体重児など

定期接種というのは、「その期間に接種するとその費用を公費で補助しますよ」というもので、接種しないといけないというものではありません。

もしもワクチン接種をお考えの際にはくれぐれも慎重にご判断下さい。

2026年1月16日

全国有志医師の会(代表 藤沢 明徳)



RSウイルスワクチン定期接種化に関する声明文はこちら